



第48回全日本ボウリング選手権
4月17・18日／稲沢グランドボウル

男子・岩切、女子・大屋選手 ともに初の選手権者に



▲「欲をかいて10ピンを飛ばしにいかず、コツコツとを心がけた」と男子選手権者の岩切選手。女子選手権者の大屋選手は「予選第2シリーズで自分の好きなラインがうまくはまって貯金を作ることができた」と、ともにうれしい全日本初制覇

日本ボウラーズ連盟も、新型コロナウイルスに振り回される形で、全国大会は実に1年以上ぶりの開催となった。この全日本選手権大会も、本来は昨年11月開催予定だったが、年度をまたいで4月17日から2日間実施された。競技は例年どおり予選9G、準決勝3G、決勝3Gの15Gトータルで争われた。

女子

予選は地元・愛知の大屋真子選手(名古屋グランドボウル)が、第2シリーズに704を打っ

てトータル1918で1位、サウスポーの林佐智江選手(ディノスボウル札幌白石)が74ピン差で2位につけ、3位以下には谷口雅美選手(牧野公園ボウル)、保木絵理選手(厚別パークボウル)、そしてディフェンディングチャンピオンの多賀谷優選手(ドリームスタジアム太田)と、歴代優勝者が続いていた。

準決勝でもリードを守った大屋選手は、決勝の1G目に240を打って2位以下との差を広げ、トータル3160で快勝、初

の全日本制覇を果たした。2位で決勝進出の林選手は491と苦しみ6位に後退。代わって多賀谷選手が2958で2位、多賀谷選手から30ピン差で谷口選手が3位に入った。

男子

予選は5G目にパーフェクトを達成した渡辺郁也選手(岡崎グランドボウル)が2020の1位で通過、濱出恵一選手(アイビーボウル向島)が42ピン差の2位、さらに9ピン差の3位に谷口尚選手(ビサイボウル)

がつけていたが、準決勝では上位選手が伸び悩みなか、予選6位の岩切政博選手(岡崎グランドボウル)が687を打って、トータル2593でトップを奪い、28ピン差の2位で古荘豊選手(ボウルアロー八尾)が続いていた。

決勝は、1G目、岩切選手が259を打てば古荘選手も258、

2G目は197の岩切選手に対し、214の古荘選手が12ピン差に詰めて最終Gを迎えた。その最終Gは、岩切選手が227を打って212の古荘選手を突き放し、トータル3276で初の選手権者に輝いた。古荘選手は27ピン及ばず2位、3位には最終G279を打った濱出選手が3187で入った。



▲左から優勝・大屋、2位・多賀谷、3位・谷口、4位・吉崎、5位・保木の各選手



▲左から優勝・岩切、2位・古荘、3位・濱出、4位・中川、5位・久保田、H/G賞の関口、渡辺、滝沢の各選手

FOCUS UP ②

コロナ禍で迎えた大学最終年。人気アマ・向谷優那選手の明日はどちらだ!?



▲マスクのビジョンに映し出された“自画像”をバックに

緊急事態宣言再発出前夜の4月24日、ラウンドワン南砂店では今年4回目の『BELLフェス×ラウンドワン LIVE』(主催:株式会社BELL)が開催された。ゲストボウラーは昨年度の全日本大学個人選手権覇者・向谷優那選手(日本経済大4年)。最近ではアマチュアの選手でも人気と実力があればチャレンジマッチに招かれることは珍しくないが、彼女はそんななかでも屈指の“売れっ子”だ。

☆ 「チャレンジは、普段なら大阪と地元の千葉で毎月1回、必ず開催されています。あとは2カ月に1回くらいのペースで相模原パークレーンズさんが呼んでくださる。ホント、ありがたい限りです(笑)」
この日のBELLフェスは昼夜2シフトの開催で、参加者は計166人。アマチュアながら“ピン”でこれだけの人数を集めてしまうのだから、逆に開催セン

ターのほうが、彼女の存在を「ありがたい」と思っているだろう。ジュニア時代から全国大会で活躍していた8歳年上の姉・美咲の影響を受け、ボウリングを始めたのは小学1年生のとき。4年次にJBCへ入会し、自身も本格的に競技人生をスタートさせたが、中学・高校と全国大会では入賞どまり。昨年の大学個人選手権優勝が悲願の初タイトルだった。

「後悔だけはしたくない」

現在、日本経済大学(福岡キャンパス)の4年生。コロナ禍で最終学年を迎えた。

「福岡では大学の寮暮らしですが、コロナのせいで去年は丸々1年リモート授業だったので、今は千葉の実家にいます」
気になるのは今後の進路だ。「周りの人にもけっこう聞かれます。就職するか、プロを目指すか、いろいろ選択肢はありますが、どんなカタチでもボウリングは続けたいと思っていますが、就職先によっては、自由に活動できなくなる可能性もある



▲全日本大学個人選手権優勝時の優勝選手(2020年2月20日、新狭山グランドボウル)

に日本にいる(VEGA八千代店に勤務)ので、お互いの都合が合うときは一緒に練習することもあります」

今回、BELLフェスに彼女を起用した鈴木馨代表(51期)は、あえて“遠回りの人生”を勧めたいという。

「プロになろうと思えばすぐになれる力はあると思うけど、個人的には一度外の世界を見てきたほうが、人間としての視野が広がっていいと思います。ボウリングはいくつになってもできるし、若いときの何年かのブランクはすぐに取り戻せる。人生、回り道しても決してもったいなくはないですよ」

いずれにせよ、最後に決断するのは優那選手自身だ。

「ありがたいことにいろいろな選択肢があるので、もうあまり時間はないけど、そのなかでできるだけじっくり考えます。自分が決めたことに対して、後悔だけはしたくないので」

一年後、彼女がどんな立ち位置でボウリングと関わっているのか、楽しみに待ちたい。

し…今まさに熟考中です」

のちに全日本ナショナルチームメンバーとして国際大会やPBAリージョナルツアーで活躍し、今はヨーロッパを主戦場に定めている姉・美咲のような生き方に憧れはあるのだろうか?

「行動力のあるお姉ちゃんのこととはとても尊敬していますが、私に同じ生き方はできないと思います(苦笑)。お姉ちゃんも、今はコロナで海外に行けず